

著：長野 展久

## 医療事故の舞台裏

## 25 のケースから学ぶ日常診療の心得

書評者：大野喜久郎(東京医科歯科大学副学長/理事・名誉教授)

病気を治そうとして、不幸にも医療事故が起こった場合、医師は診療結果に失望し、同時に患者さんや家族との信頼関係が損なわれると、クレームの嵐に晒されることになる。一流の名医といわれる医師でも、人間である限り、医療事故は免れない。そうならないような備えと起こったときにどうするかが重要であり、本書はそのための手がかりを与えてくれる。

まず、本書の「はじめに」を読むと著者が本書を著した意図がよくわかる。医学や医療の問題に深く切り込み、医師および患者の心理学、救急診断学に必要な医学的知識、そして救急診療のヒントなどが読みやすく書かれており、このような本は今までなかったように思う。著者のこれまでの経験に基づく優れた洞察力による研究書でもある。医師側および患者側の両者にとって不幸な事例に対し、何が問題であったのかを丁寧に解説し、同じことが起きないようにとの温かい配慮がなされている。これは著者自身の医師としての長い経験と多くの医療事故の分析に裏打ちされていることによるもの

と思う。日常診療において研修医だけでなく、経験を積んだ医師も気をつけなければならないことが書かれている。そして、時間外当直での診療、あるいは救急患者の診療には恐ろしい落とし穴がいくつもあるように感じる方も多いと思う。たしかに、思い込みや忙しさからのミスは起こりうるもので、いつも念頭に置く必要がある。

ケースの詳細な記述と1つ1つの事例の教訓、11のコラムも役立つ記載となっている。25のケースでは診療上の注意あるいは説明義務違反が多いようであり、期待権の侵害や自己決定権の侵害が続く。自らが体験してからでは遅いので、既に起こったことを学習して想像力を働かせることが重要である。「医療の不確実性」にもかかわらず「結果責任」という言葉は常について回る。医療を行う側にとってはきわめて不本意で理不尽なものであるが、しばしば一人歩きする。

本書で著者が述べているように、患者の診療に当たっては、特に救急医療においては鑑別診断を挙げて、常にその中で最も危険な

疾病の可能性から順に考えていくことが重要と思う。また、こうであろうと考えても、常に急変する疾病や最悪の事態を引き起こす疾病を考慮しておくことが必要であろう。医師に必要な資質は、忍耐力であり、想像力であり、シャーロックホームズばりの推理力であり、またあるときはこれよりよいかという不安感(用心深さ)であるといえるかもしれない。

臨床医であれば誰でも医療事故に巻き込まれる可能性があるが、本書はその可能性をより小さくしてくれるであろう。そして、たとえそのような状況に陥っても、いつでも緊張を保ち、行うべきことを行って、真摯に患者およびその家族に接することにより、医療裁判へとつながる可能性も小さくなることが期待される。臨床医の皆さんにはぜひ一読していただきたい本である。

● A5 頁272 2012年  
定価2,625円  
(本体2,500円+税5%)  
[ISBN978-4-260-01663-6]  
医学書院刊